

じょ ぎょうけん

徐 暁 娟

論文題目

中国の大学日本語教育におけるブレンディッド・ラーニングの応用に関する研究

論文要旨

本研究では、中国の大学日本語教育における学習者の学習意欲の欠如、及びコミュニケーション能力向上とIT活用の促進という課題に対し、ブレンディッド・ラーニング(Blended Learning, BL)という教育方法の導入を提案し、その理論モデルデザインを行った。この理論モデルに基づき、学習者の学習意欲とコミュニケーション能力・意欲の向上を目的とするeラーニングでの事前自主学習・教室での協働学習・日本人大学生との遠隔交流の3つの学習形態を組み合わせたBL授業モデルをデザインし、その有効性を検証した。論文の構成は、以下の8章構成となっている。

第1章では、研究の背景、研究の目的、研究の意義と期待される成果、論文の全体の構成および用語と定義について述べた。近年、中国の大学日本語教育の発展に伴う日本語学習者の学習意欲の促進、コミュニケーション能力の育成、教育情報化に伴うICT活用教育・学習の推進という課題に対し、日本語教育・学習の現場ではこれらの課題に対応できておらず、教師中心型の知識伝達を重視する従来のパラダイムから脱却できていないという課題を述べた。

このような背景を踏まえて、本研究では、中国の大学日本語専攻の学習者の学習意欲、コミュニケーション能力・意欲を向上させることを目的とし、日本語教育・学習の現場での、BLの重要性を述べた。

第2章では、中国における日本語教育の変遷について概観し、現在の中国日本語教育の現状と課題を述べた。中国の現代における日本語教育史を、「黎明期・揺籃期(1949年から1969年まで)」、「復興期・確立期(1970年から1989年まで)」、「成長期・成熟期(1990年から2010年まで)」、「転換期(2011年から2017年まで)」、「新時代(2018年以降)」の4つの段階に区分した。各時期の日本語教育の特徴を教材、教師、教育方法の観点から記述し、中国における日本語教育の発展と現状を概観した。現在の中国日本語教育においては、教育内容、授業内容の多様性、異文化コミュニケーション能力の重視に基づいて、インターネットなどの利用によって学習時間と空間を最大限に活用する教育手段の改革、積極的なコミュニケーション能力を培うこと、教育における日中の連携などが強調されるようになっているものの、いかに教育手段を改革し、学習者のコミュニケーション能力を向上させ、日中間を連携するのかなどの課題を抱えていることを指摘した。

第3章では、BLに関する先行研究、学習意欲に関する先行研究及びコミュニケーション能力に関する先行研究の成果と課題を検討・議論した。その上で、本研究の学術上の位置づけを確認した。

BLに関する研究については、BLに関する理論研究、第二言語教育におけるBL研究、日本語教育におけるBL研究の3つの部分に分けて詳述した。BLに関する理論研究は、主にBLの定義、目的・機能の変化、BLモデルについて述べた。過去20年間のBLの概念は、技術に注目する段階（90年代末～2006年）、教師に注目する段階（2007年～2013年）、学習者に注目する段階（2013年～今現在）の3つの段階を経てきており、BLの技術的特徴への注目が徐々に弱まり、その教育的特性が徐々に強化されるプロセスであることがわかった。したがって、本研究では、先行研究に基づき、BLを「学習者中心の対面授業とオンライン授業を組み合わせた学習環境での教育と個別指導の融合」と定義した。BLの目的・機能が「代替・支援説」の観点から「強化・改善説」に変化したことを述べ、本研究でデザインしたBLモデルの目的・機能は「強化・改善説」に位置づけられることを明確にした。

第二言語教育におけるBL研究については主に「理論に関する研究」、「教育への効果に関する研究」、「BLの実証・実践研究」に分けて検討した。先行研究は、学習者の学習成績と学習意欲の面からBLの有効性を検証し、BLと学習者の態度、BLの学習者の諸側面への効果、BLにおけるオンライン授業と対面授業という2つの学習形態間の相互関係についても検討がなされている一方、効果の要因については十分な分析を行っていないという課題を指摘した。

日本語教育におけるBL研究は主に実践・実証的な研究であり、具体的には「BLに対する学習者からの評価」、「BLによる学習者の各側面の変容」、「BLの教育への効果」を明確にすることが研究目的であった。(1) BLに対する学習者からの評価に関する研究から、学習者は「講義動画」、「ピア活動」、「SPOC(Small Private Online Course)の導入」を肯定的に評価している一方、「時間的な負担」や「教師の不在による不安」、「オンライン宿題」に対する満足度が低いことが示されている。(2) BLによる学習者の各側面の変容に関する研究から、BLは学習者の「学習への興味」、「学習の効率」、「日本語口頭能力」、「コミュニケーション能力」、「自主学習能力」、「協働学習能力」の向上に効果があることが示されている。(3) BLの教育への有効性と限界を検討する研究から、BLは教育の効果・効率・魅力を高めた一方、「不安を感じる学習者」、「学習の自主性が低い学習者」はBLに適応できないことが示された。先行研究では、BLの各要素間の相互関係や、BLによる学習者の各側面の変容要因について検討する研究は見られなかった。

学習意欲に関する先行研究については、学習意欲の定義、学習意欲の理論的枠組みについて検討した。学習意欲とは、特定の行為の選択、持続性、努力性に関するものである。これらの定義を踏まえ、本研究の研究課題に合わせて、本研究における学習意欲を「学習行動を喚起する心理的エネルギー」と定義した。本研究は学習意欲研究の変遷の中で、学習意欲方略に位置づけられる。続いて、多くの学習意欲研究で援用される理論的枠組みである統合的意欲と道具的意欲の枠組み、内発的意欲と外発的意欲の枠組み、学習意欲方略としてのARCS-Vモデルについて述べた。鈴木ら(2016)は、ARCS-Vモデルは学習意欲を高めるための理論と実践の両方に支えられたモデルであり、教材づくりや授業づくりの面に利用することができると述べている。本研究では、中国における日本語学習者の学習意欲を向上させることが目的であるため、BL日本語授業のデザインにこのARCS-Vモデルを利用することを明確にした。

コミュニケーション能力に関する先行研究については、コミュニケーション能力についての基本概念および構成要素に関する諸研究を検討した。これらの先行研究が提示する諸理論では、研究者によってコミュニケーション能力の構成要素が異なってい

るものの、方略能力という要素はどの研究者のモデルでも取り入れられている。それぞれの理論では、方略能力は「コミュニケーションに支障が起こった場合の補償ストラテジー」(Canale and Swain, 1980 ; Celce-Murcia, Dörnyei & Thurrell, 1995), 「言語能力の不足を補う手段」(Savignon, 1983), 「学習ストラテジーとコミュニケーション・ストラテジー」(Celce-Murcia, 1995, 2007), 「知識運用を統括する能力」(Bachman, 1990) など異なる定義がされているが、いずれにおいても方略能力という構成要素を特に重視している。特に, Celce-Murcia (2007) のコミュニケーション能力モデルでは, コミュニケーション能力の構成要素は経験を通して習得されていくものであり, 方略能力はすべての構成要素を支えるものとして位置づけられている。この Celce-Murcia (2007) の「方略能力」の捉え方にに基づき, 本論文では, 「方略能力」を中心に学習者のコミュニケーション能力の変化を考察することを明確にした。

一方, 学習者のコミュニケーション能力を高めるためには, 学習者のコミュニケーションへの意欲を高めることが重要であることが指摘されている。第二言語教育と日本語教育における BL に関する先行研究から, BL 型授業は学習者の「学習意欲」, 「協働学習能力」, 「自律学習能力」, 「コミュニケーション能力」, 学習の「満足度」などの側面を向上させる可能性が指摘されているため, 本研究では, 中国の大学における日本語学習者の学習意欲とコミュニケーション能力を向上させる上で, BL 型授業を採用することの持つ可能性を確認した。

第4章では, 先行研究を概観し, 議論した上で, BL 第二言語教育の理論モデルの構築を行った。McCarthy (2016) は, SLA を促進する BL の関連理論研究は SLA 理論・研究, 教室インタラクション研究, コーパス分析・テクノロジーを媒介とした言語学習の3つの研究・理論からなるとしている。本研究ではこの McCarthy (2016) の BL デザインの枠組みを基に, 折衷アプローチによる SLA 理論, 協働学習理論, コンピュータを介した学習の3要素に学習意欲理論を加えた BL 第二言語教育の理論モデルを構築した。構築した BL 第二言語教育の理論モデルに基づき, e ラーニング・教室協働学習・遠隔交流を組み合わせた BL 日本語授業をデザインした。

第5章では, BL デザインを検証するにあたり, 教育研究方法, 実験授業を実施する上で必要となる準備, カリキュラムと BL 授業のデザイン, 学習ニーズに合わせて独自に開発した教材, 授業実践に必要な環境, データ収集, 研究の課題と分析方法について説明した。

デザインした BL 日本語授業の効果を検証する際, 従来の先行研究では使用されてきた統制群デザインの検証方法は, 授業の場で操作要因(本研究では BL)以外の要因を統制して2クラスを等質にするという厳密な条件統制は不可能であり, また, 授業を受ける学習者に等しく望ましい行動を実現しようとする教師側の援助を統制群が受けられないという倫理的な短所があるため, 本研究では, 検証方法として, 統制群を使わず, 単群デザインの実験授業を用いることにした。

実験授業は, 中国の4年制大学である Y 大学外国語学院に属する日本語専攻3年生16名を実験対象とした。授業活動のデザインにおいては, L2WTC モデルを ARCS-V モデルに統合した5つの構成要素モデルに基づき, 活動を設定していった。①e ラーニングでは, 既存の LMS 上に, 動画コンテンツ(トピック動画, 講義動画)と教室協働学習のための準備タスクを設置し, 学習者は授業前に LMS 上の内容を自主学習する。②教室協働学習では, e ラーニング動画についてグループディスカッションやピア・ラーニングの形態で「意見交換」や「指定課題」を行い, その後の遠隔交流活動の準備をする。③遠隔交流活動では, 中国人学生と日本人大学生がインターネットを介しての交

流をする。

この BL 日本語授業の効果を検証するにあたり、2つの研究課題を設定した。①eラーニング・教室協働学習・遠隔交流を組み合わせた BL の中国大学日本語学習者の学習意欲への効果とその要因を明らかにする。②eラーニング・教室協働学習・遠隔交流を組み合わせた BL の中国大学日本語学習者のコミュニケーション能力・意欲への効果と要因を明らかにする。研究課題①の中心となる日本語学習者の学習意欲の分析については質的記述的研究法、視聴ログの分析、日本語学習者の全体的な学習意欲変化の要因分析については M-GTA を用いて、分析を行った。研究課題②の中心となる日本語学習者のコミュニケーション能力・意欲の分析についてはコミュニケーション・ストラテジー (CS) と発話量を焦点に分析し、日本語学習者の全体的なコミュニケーション能力・意欲の変化要因分析については M-GTA を用いて、分析を行った。

第6章では、研究課題①について、視聴ログ分析の結果、BL日本語授業において、回を追って全体的に学習者の視聴時間は大幅な改善が見られ、学習意欲が向上したことが窺えた。しかし、視聴ログを学習者別に分析した結果、個人差があることもわかった。日本語学習者の全体的な学習意欲変化の要因を明らかにするため行った事前事後インタビューデータの M-GTA 分析の結果、BL日本語授業前に、学習者は日本語学習に対して、期末試験にパスできるため、無事に卒業できるためという最も自己決定度が低い学習意欲を持っていたが、BL日本語授業を受けた後、日本人とうまくコミュニケーションできるようになるため、日本という国をもっと理解するためという自己決定度が高い学習意欲を持つようになったことがわかった。本研究でデザインした BL 日本語授業は、Keller の ARCS-V モデルの「注意」、「関連性」、「自信」、「満足感」、「意志」の5つの要因すべてが学習者の学習意欲の向上に作用していたことが明らかになった。一方、個人差に着目した質的記述的研究法で各学習者の学習意欲の変化プロセスを分析した結果からは、16名の学習者のうち、S16を除いた15名の学習者はBL日本語授業前後で学習意欲が向上したことが分かった。

第7章では、研究課題②eラーニング・教室協働学習・遠隔交流を組み合わせた BL の中国大学日本語学習者のコミュニケーション能力・意欲への効果と要因については、遠隔交流の録画録音データの文字化資料をデータとし、CS と発話量を焦点に分析した。まず、データ分析のアプローチである会話分析について説明した上で、学習者の CS の使用変化の分析結果、産出した発話量分析の結果を示すと共に、毎回の遠隔交流後のフォローアップインタビューデータを分析し、学習者のコミュニケーション能力・意欲の変化とその要因を示した。CS 使用率の減少を日本語言語能力向上の指標、CS 使用の増加と発話量の増加をコミュニケーション能力向上の指標とした。遠隔交流における学習者の発話量の推移と CS 使用の推移を合わせて考察した結果、学習者の日本語コミュニケーション能力が向上したことが明らかとなり、本研究でデザインした遠隔交流を取り入れた BL 日本語授業が学習者の日本語コミュニケーション能力・意欲の向上に一定の効果があることが確認された。

第8章では、本研究全体の総括を行い、結論を述べた上で、本研究の意義、今後の課題についてまとめた。本研究の学術的成果と意義は、①中国の大学日本語教育をフィールドとした eラーニング・教室協働学習・遠隔交流を組み合わせた BL 日本語授業モデルを開発した、②BL による学習者の学習意欲の変化プロセスを明らかにした、③ビデオチャットを用いた遠隔交流が中国における日本語教育にもたらす効果に関する洞察を提供している点である。今後の課題として、本研究の成果の一般化や応用可能性を検討し、BL モデル、研究方法、分析方略などが、異なる文脈においても同等の効果をもた

らす有効なものかどうか、フィールドを変えて継続的に実践することで、さらに探究し、検証を繰り返す必要がある。さらに、研究プロセスのうち、評価指標や分析手法をさらに精緻化することで、研究の質を高めることを目指したい。

参考文献

鈴木克明・市川尚・根本淳子 (2016) 『インストラクショナルデザインの道具箱 101』 北大路書房.

Bachman, L. F. (1990) *Fundamental considerations in language testing*. Oxford: Oxford University Press.

Canale, M. and Swain, M. (1980). Theoretical bases of communicative approach to second language teaching and testing. *Applied Linguistics* 1, 1-47.

Celce-Murcia, M, Dörnyei., & Thurrell, S. (1995) *Communicative Competence: A Pedagogically Motivated Model with Content Specifications*. *Issues in Applied Linguistics*, 6(2) 5-35.

Celce-Murcia, M. (2007) *Rethinking the Role of Communicative Competence in Language Teaching*. In A. A. Soler., & M. P. Safont Jorda (eds.), *Intercultural Language Use and Language Learning*. Dordrecht: Springer. 41-57.

Keller, J. M. (1984) *The use of the ARCS model of motivation in teacher training*. In K. S. A. J. Trott (Ed.), *Aspects of educational technology volume XVII: Staff development and career updating*. London: Kogan Page.

McCarthy, M.J. (2016) *Issues in Second Language Acquisition in Relation to Blended Learning*, *The Cambridge Guide to Blended Learning for Language Teaching*. 7-24.

審査結果の要旨

徐曉娟氏による学位審査請求論文に対する本審査会を、審査員3名及びオブザーバーとして東亜大学大学院総合学術研究科人間科学専攻主任・古川智教授にご出席いただき、令和4年8月28日11:00～12:10に開催した。なお、新型コロナウイルス感染症拡大のため、審査会はZoomによるオンライン形式で実施された。

冒頭約30分で論文要旨の説明を徐曉娟氏が行い、その後に論文内容についての質疑応答を約40分間行った。論文審査員から複数の質問がなされ、それらに対する回答が徐曉娟氏からなされた。回答の中には、審査員の質問に対するものとして十分でない回答もあったものの、論文全体の評価に影響するものではなく、修正検討課題とされた。その後、合否判定を審査委員間で行った結果、審査委員会として「合格」の判定を下した。同日13:00に開催された公聴会において発表が行われ、公聴会参加者から複数の質問がなされ、それらに対する回答が徐曉娟氏からなされた。公聴会終了後、合否の議論を専攻教員間で行った結果、人間科学専攻の総意として「合格」の判定を下した。なお審査会の際に、審査委員会から主要用語の定義が不十分であること、先行理論からモデル構築への理論的展開が十分説得性のあるものとなっていないこと、第7章のコミュニケーション能力測定の方法及びその分析結果の解釈への疑義、本研究によってデザインされた教育方法の中国大学日本語専攻教育への応用可能性について明確な記述を行う必要が指摘され、該当章および結論である第8章において修正・加筆することが求められた。その後修正がなされ、適切に修正されていることを審査委員会として確認した。

主たる審査会の内容は以下の通りである。

1. 本論文は、中国の大学日本語専攻教育における学習意欲の向上、コミュニケーション能力育成の必要性、ICT活用という課題への応答として、遠隔交流を取り入れたブレンディッド・ラーニングに着目し、その教育方法論の構築を行ったものである。論文として十分な内容と適切な論考構成を持つものであるが、各論考の緻密さという点で粗さが見られる。第3章先行研究では、主要概念についての広範な先行研究・理論が網羅されているものの、列挙にとどまる印象を受ける。このため、先行理論からモデル構築への理論的展開が十分説得性のあるものとなっておらず、基盤理論との整合性・一貫性が不明瞭であるとの指摘がなされた。
2. また、実験授業の検証方法についても問題の指摘がなされた。学習意欲とコミュニケーション能力・意欲の2側面から検証を行っているが、いずれにおいても分析方法の選定、評価基準の設定、結果の解釈の妥当性が議論となった。この点は本研究の最も大きな課題であろう。ただし、実験授業研究において単群デザインのリスクを補うため、多様なデータを多角的に分析しようとする本研究の試みは評価できるものであり、上述の問題はあるとしても価値のある研究として認められる。今後、異なる分析方法、評価基準により本データを再検証することで新たな発見も期待できる。

3. 本研究は中国の大学日本語専攻教育の直面する課題への応答として、実践への応用価値が非常に高い意義ある教育方法研究である。したがって、この研究が実践において活かされるために、本方法論の効果が特に期待される参加者の特性、教材特性及びその作成・利用法の詳細、学習環境、教師の役割など、実践に移す上で必要となる情報を中国で日本語教育に携わる教師たちにより応用しやすい形で提供・公開されていくことが望まれる。本研究で構築された BL 日本語授業が中国日本語教育界に広く還元されることが期待される。

以上